

大阪商業大学学術情報リポジトリ

国際囲碁連盟のなりたちと今後の課題

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2014-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重野, 由紀, SHIGENO, Yuki メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/22

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



国際囲碁連盟のなりたちと今後の課題

重 野 由 紀

1 . はじめに

1982年国際囲碁連盟（International Go Federation / IGF）が日本棋院発のリーダーシップの元に誕生して30年程になります。当初28ヵ国と地域から始まった同連盟は2014年1月現在、74ヵ国と地域の国会員と4つの団体会員（イペロアメリカ囲碁協会、世界ペア碁協会、欧州囲碁連盟、應昌期圍棋教育基金）が加盟する世界で唯一の国際囲碁組織になりました。本部は日本棋院海外室に置かれ、現在国際囲碁連盟会長は松浦晃一郎氏（ユネスコ前事務総長）が務めています。

2006年から事務局長として国際囲碁連盟に関わり8年が過ぎました。発足以来日本棋院主導による会長、事務局長を中心に運営されてきた国際囲碁連盟は2014年7月韓国で開かれる国際囲碁連盟年次総会で韓国棋院に国際囲碁連盟会長が移ります。（韓国棋院理事長が就任する予定）それに伴い事務局長も初めて韓国棋院が務める事となりました。国際囲碁連盟にとって新しい展開を迎える節目の年です、これまでの国際囲碁連盟の軌跡を記録すると共に抱える課題等をまとめます。

2 . 1979年第一回世界アマチュア選手権戦から2002年まで

a) 1979年第一回世界アマチュア選手権戦のはじまり

1979年3 / 13 - 17、15ヵ国から30人の選手が参加し歴史上初めての世界囲碁大会、日本航空主催の世界アマチュア囲碁選手権戦（World Amateur Go Championship / WAGC）が日本棋院で盛大に開かれました。前夜祭では福田赳夫元首相が祝辞をのべ、親善対局には政界から稲葉修元法務大臣、与謝野馨氏、大の囲碁ファンで知られる

小説家の江崎誠致氏など蒼々たる顔ぶれが集まり、初めての囲碁を通じた文化による国際交流イベントが盛大に開かれました。連日テレビ局が取材に日本棋院を訪れ、大会の様子は後日特別番組として数回シリーズでテレビ放映されるなど、その当時の本大会への注目度や社会的な関心の高さは、海外旅行や外国人が囲碁を打つ事がそれほど珍しくない今の時代には、想像のできない熱く力の入ったものでした。

表1 世界アマチュア囲碁選手権戦1979年第1回大会～2013年第34回大会の開催地と参加国数、優勝者リスト

	Date	Countries/ Territories	Place	Winner	Country	Tied
34th	1-4.09.2013	56	Sendai	Hyunjae Choi	Korea	
33rd	14-17.05.2012	55	Guangzhou	Qiao Zhijian	China	
32nd	29.05-01.06.2011	57	Matsue	Baoxiang Bai	China	
31st	26-29.05.2010	60	Hangzhou	Hongsuk Song	Korea	
30th	27-30.05.2009	66	Fukuroi	Yuqing Hu	China	
29th	28-31.05.2008	68	Tokyo	Sung Bong Ha	S.Korea	
28th	28-31.05.2007	68	Tokyo	Shan Ziteng	China	
27th	28-31.05.2006	68	Sasebo	Hiraoka Satoshi	Japan	China/DPR Korea/Korea
26th	24-27.05.2005	65	Nagoya	Hu YuQing	China	
25th	06-10.06.2004	64	Kurashiki	Lee Kang Wook	Korea	
24th	02-06.06.2002	61	Takayama	Fu Li	China	
23rd	10-14.06.2001	57	Hyuga	Li Daichun	China	
22nd	19-22.06.2000	55	Sendai	Sakai Hideuki	Japan	
21st	08-11.06.1999	55	Oita	Yoo Jae-Sung	Korea	
20th	02-05.06.1998	50	Tokyo	Kim Chan-Woo	Korea	
19th	10-13.06.1997	46	Sapporo		Liu Jun	China
18th	21-24.05.1996	46	Omachi	Liu Jun	China	
17th	23-26.05.1995	44	Tokyo	Hirata Hironori	Japan	China
16th	23-26.05.1994	43	Kyoto	Hiraoka Satoshi	Japan	
15th	25-28.05.1993	40	Fukuoka	Sun Yiguo	China	Korea
14th	25-30.05.1992	40	Chiba	Kikuchi Yasuro	Japan	Korea/China
13th	21-24.05.1991	39	Kanazawa	Imamura Fumiaki	Japan	Taipei/ Netherlands
12th	22-25.05.1990	39	Hiroshima	Chang Hao	China	
11th	23-26.05.1989	38	Nagoya	Che Zewu	China	Taipei
10th	17-20.05.1988	36	Tokyo	Zhang Wendong	China	

国際囲碁連盟のなりたちと今後の課題

	Date	Countries/ Territories	Place	Winner	Country	Tied
9th	12-16.05.1987	34	Beijing	Imamura Fumiaki	Japan	China/Korea
8th	27-30.05.1986	34	Tokyo	Chan Ka Yui	Hong Kong	Japan
7th	21-24.05.1985	31	Tokyo	Wang Jianhong	China	
6th	10-13.04.1984	30	Tokyo	Wang Qun	China	
5th	1983	29	Osaka	Ma Xiaochun	China	
4th	1982	28	Tokyo	Cao Dayuan	China	
3rd	1981	23	Tokyo	Shao Zhenzhong	China	
2nd	1980	23	Tokyo	Imamura Fumiaki	Japan	
1st	1979	15	Tokyo	Nie Weiping	China	

記念すべき第1回世界アマチュア選手権戦大会の優勝者は中国の聶衛平氏です。文化革命終結から数年後の中国囲碁界は再生を目指し奔走中であり『中国棋院』はまだなくプロ制度もありませんでした。1982年プロ制度が発足、第一号棋士の一人が聶衛平氏です。のちに1984年から2001年まで行われた日本 vs 中国との対抗戦『日中スーパー囲碁』では初回から3年間、聶衛平氏は最終プレイヤーとして出場し11連勝の快進撃を遂げ、中国チームを勝利に導いた立役者です。“鉄のゴールキーパー”のニックネームで賞される実績と人気で、今でも囲碁界に留まらず聶衛平氏は中国の国民的英雄です。



図1 優勝カップをかかえた中国代表、聶衛平氏（当時27才）

当初は唯一の国際囲碁界との窓口として、また聶衛平氏をはじめとして陳祖徳、王汝南、曹大元、馬曉春、劉小光、王群、張文東、常昊（敬称略）のちに中国囲碁界のリーダーとなるべく蒼々たるスター棋士の発掘に繋がったように、国際囲碁界に実力を試す

機会でもありました。最近でも2013年12月弱冠二十歳、彗星のように現れ三星火災杯で優勝をさらった唐韋星三段は、2006年第27回世界アマチュア囲碁選手権戦長崎大会で日本代表平岡聡選手と同率ながら勝ち点で準優勝、常昊九段と同じく最年少記録13才で話題をさらった天才囲碁棋士です。

また韓国では世界アマチュア囲碁選手権戦の優勝者はプロ資格を得られるシステムが、長年設けられていました。年齢制限により院生を卒業した若者にとっては、限られたプロへの門として大きなチャンスになっていました。その後、プロ予選にアマチュアも参加できる制度がスタートしたことなどから2005年にこの制度は廃止され、その後はプロ資格獲得のためのポイント加点対象大会の一つになっています。昨年、仙台で開かれた第34回世界アマチュア囲碁選手権戦で優勝を果たした韓国代表崔顯宰選手の場合も、それにより規定ポイントに達したためプロ資格を獲得しました。

b) 1982年国際囲碁連盟の誕生

本大会をきっかけとして、ゆくゆくは政治における国際連合（UN）、スポーツにおける国際オリンピック委員会（IOC）のような権威のある国際囲碁機関になることを期待し、また国際ルールの制定、囲碁未開国への普及活動や参加呼びかけ等の役割を果たすべし国際囲碁組織の必要性が問われるようになりました。そうしたことから1982年3月、第4回世界アマチュア囲碁選手権戦に集った29カ国と地域の代表国を中心に、国際囲碁連盟が日本棋院主導の基に発足、会長（代行）として有光次郎（元文部事務次官）が就任しました。

『飛行機は人を運ぶだけでない。文化も運ぶんだ。』当時、本大会設立にあたっての主演であり日本航空社長、大会実行委員長を務めた朝田静夫氏は口癖のようにそう語り、国際文化交流としての囲碁のあり方に大変な理解と尽力を注ぎました。朝田静夫氏は1988年～93年にかけて、その後も渡辺文夫氏1993年～98年、利光松男氏1999年～2004年三代続けて合計16年間に渡り日本航空社長、又は会長が日本棋院理事長を務め日本航空は日本囲碁界にとって最大応援団体の一つでした。また1983年以降2004年まで、前記の三者が国際囲碁連盟会長を務め、そのことは世界アマチュア選手権戦継続への大きな後ろ盾となったことは言うまでもありません。

国際囲碁連盟のなりたちと今後の課題

歴代国際囲碁連盟会長（敬称略）

1982	1983	有	光	次	郎
1983	1996	朝	田	静	夫
1997	2001	渡	辺	文	夫
2001	2004	利	光	松	男
2004	2004	加	藤	正	夫
2005	2006	工	藤	紀	夫
2006	2009	岡	部		弘
2009	2010	大	竹	英	雄
2010	2012	常		振	明
2012	2014	松	浦	晃	一郎

表 2 国際囲碁連盟会員国の加盟リスト

Affiliation Record of the IGF members

January, 2014

(Number of Members)

<u>1982</u> (29)	<u>1983</u> (31)	<u>1990</u> (38)	<u>1999</u> (57)	<u>2000</u> (59)
	Mexico	Ireland	Colombia	Lithuania
Argentina	Thailand		Guatemala	Armenia
Australia		<u>1991</u> (39)	Madagascar	
Austria		D.P.R. Korea	Morocco	<u>2001</u> (63)
Brazil	<u>1985</u> (35)		Peru	Belarus
Canada	Belgium	<u>1992</u> (42)	Vietnam	Bosnia-Herzegovina
China	Luxembourg	Portugal		
Czech Rep	C.Taipei	Slovenia		Ecuador
Denmark	Russian Fed.	Venezuela		Uruguay
Finland				
France	<u>1987</u> (36)	<u>1993</u> (45)		<u>2002</u> (64)
Germany	Malaysia	S. Africa		Nepal
C. Hong Kong		Turkey		<u>2003</u> (66)
Hungary	<u>1989</u> (37)	Ukraine		Mongolia
Italy	Chile			Panama
Japan		<u>1994</u> (48)		
Korea		Cuba		<u>2005</u> (68)
Netherlands		Indonesia		Azerbaijan
New Zealand		Slovenia		Bulgaria
Norway				Cyprus
Philippines			(Philippines expelled in 2005)	
Poland		<u>1997</u> (51)		
Romania		Croatia		<u>2006</u> (69)
Singapore		India		Cost Rica
Spain		Israel		
Sweden				<u>2007</u> (70)
Switzerland				Philippines
U.K.				
U.S.A.				<u>2008</u> (71)
Yugoslavia (later Serbia-Montenegro)				C. Macao
				<u>2012</u> (74)
				Brunei
				Kazakhstan
				Latvia

国際囲碁連盟のなりたちと今後の課題

ｃ）国際囲碁大会の主管を務める

世界アマチュア囲碁選手権戦以外では1989年～1998年相鉄（相模鉄道株式会社）杯世界初の女流アマチュア大会が国際囲碁連盟主管で開かれました。1992年までは毎年、その後は二年ごとに1998年第7回大会まで行われ、20カ国程からトップアマチュア女流選手が横浜に集合。きらびやかな民族衣装をまとった各国の女性棋士を一同にした開会式は、とても華やかで注目を浴びました。財政的な理由からでしょうか、10年足らずの期間で終わってしまいとても残念でした。



At the Opening Ceremony: Monique Berreby (France), Raffaella Giardino (Italy), Carmen-Maria Mateescu (Romania), Sato Akiko (Japan), Eleonore Gruber (Austria), and Beatriz Martinez (Spain)

図2 第五回横浜相鉄杯開会式の様子。優勝は日本代表の佐藤亜紀子さん。

1991年から始まった国際ペア碁選手権戦では2009年まで、国際囲碁連盟は主管を務めました。その後は国際レベルでの囲碁普及を念頭に国際ペア碁協会は国際囲碁連盟の団体会員として2009年に加盟、現在まで協力関係にあります。2014年国際ペア碁大会は25年目を迎え、記念イベントが予定されています。

また1997年8月には避暑地で有名な長野県軽井沢プリンスホテルを会場に『アジア&太平洋碁コンgres』が日本棋院、国際囲碁連盟の共同開催で開かれ、日本航空が協賛、無料航空券が支給されました。これは対象地域（中国、韓国、中華台北、マレーシア、シンガポール、タイ、インドネシア、オーストリア、ニュージーランド）の小学生1人とその家族2名、役員1名を日本へ招待し、親善囲碁大会やペア碁、団体戦、指導

碁、観光、花火大会など織り込んだ一週間にわたる家族主体の国際囲碁交流イベントでした。このような家族旅行を兼ねた、囲碁をツールにした楽しい国際イベントがもっと一般的になれば、囲碁ファンの裾野を広げる機会に繋がると思います。

d) 2002年までの国際囲碁連盟としての活動

2002年まで発足してから20年という長い年月の間、前記のような日本企業や日本の団体が主催する大会や交流イベントで主管を務めることはありましたが、世界アマチュア囲碁選手権戦を日本で毎年開催（第九回北京大会除く）し、その大会期間中に国際囲碁連盟理事会と総会を開く以外に組織として目立った活動はありませんでした。

実際、この間には韓国理事から世界アマチュア囲碁選手権戦の韓国開催の提案、また日蘭友好イベントの一環としてオランダで開催したい、と言った声が欧州理事からありましたがいずれも実現しませんでした。もしこのような初期の段階で世界アマチュア囲碁選手権戦が日本以外の諸外国で持ち回りの形式で開催するようであったなら、国際囲碁連盟の存在も国際囲碁普及のスピードも今とは全く違ったものであったと思います。日本航空がスポンサーで無料航空券を提供する、という基本条件があつての本大会であったことは充分理解するところですが、本来の意味での国際囲碁連盟としての囲碁普及を考えた場合に大変残念なことです。

またその当時の中国や韓国は経済的にも不安定であり、囲碁の実力面でもまだ日本が優位な時代でした。国際囲碁界の根幹である重要事項、例えば国際ルール統一、統一ルールに伴う国際審判の制定、国際レーティングの導入、国際囲碁連盟認可の国際大会の設立等など日本、日本棋院が主導で制定できる大きなチャンスであったと思います。国際囲碁連盟が日本、中国、韓国の三カ国棋院で支援する形となって、経済的にも立場的にも三カ国が均等に力をもつ今の時代においては、こうした国際レベルでの統一を計るには三カ国の共通認識と相互協力、それに費やす時間とエネルギーが必要です。残念ながら日本棋院の主導でまとめるには、もはや簡単な状況ではありません。

e) 1997年5月『囲碁をオリンピックに』

この期間に一点、記録すべき活動として1997年5月『囲碁をオリンピックに』をス

ローガンに日本棋院は国際オリンピック委員会（International Olympic Committee／IOC）への加盟を表明、署名活動や基金を設立するなど数年間にわたり国際囲碁連盟と連動しながら IOC に働きかけを行ったことです。マインドスポーツを代表するチェス、ブリッジは共に1990年代に IOC から国際競技連盟認定を受けており、囲碁も2008年北京夏季オリンピックを目指しての運動でした。続いて1999年、国際囲碁連盟は IOC に加盟申請をしましたが受理されず2001年に断念。その理由として審査のハードルが昨今厳しくなっていること、マインドスポーツへの方針が変更されたことなど考えられます。

しかしこの結果を基に2002年、国際囲碁連盟は国際競技連盟連合（GAISF）への加盟申請を理事会／総会で決定、国際囲碁連盟は新しい方向性を見出す事になりました。

3．マインドスポーツとしての囲碁

a）GAISF（2009年 SportAccord に改名）への加盟

当時、国際囲碁連盟副会長でヨーロッパ日本文化センター（EGCC）のマネージャーであった Eric PUYT（エリック・パウト）氏と、前国際囲碁連盟山本利一事務局長の二人三脚の働きかけにより、2004年 GAISF に加盟申請を提出、2005年ドイツ、ベルリンでの GAISF 総会で加盟を承認され（準加盟）、2006年韓国、ソウルでの GAISF 総会で正加盟を果たしました。その頃の GAISF は国際オリンピック委員会（IOC）のいわば姉妹機関のような組織で109の国際競技団体が加盟（2013年8月現在）、IOC加盟団体は GAISF にも加盟しています。マインドスポーツとしての新しい道を切り開いた二人の功績は大変大きく、国際囲碁連盟の未来図を大きく変えました。

GAISF に加盟した事により世界で唯一の国際囲碁組織として、国際スポーツ界に認知されたことは重要視すべきポイントです。それにより IOC 関連の大会（アジア大会等）に関わることが可能となり、名称に関しても国際スポーツ界では囲碁は『Go』と表され、IGF が公認する大会のみが正式には「国際大会」と位置づけられます。2009

年国際囲碁連盟理事会で『英語の囲碁名称を Go で統一する』ことが承認されていますが、現実には国際囲碁大会を主に主催する日本、中国、韓国の間で共通認識が未だ根付いておらず、中国は『WEIQI』、韓国『BADUK』と独自の英語表記を使用しています。今後の囲碁普及において、一日も早い国際囲碁用語表記の統一が望まれるところです。



図3 2010年第16回広州アジア大会で初めてチェス競技の一つとして囲碁が取り上げられました。広州棋院にて、ペア碁競技の様様。

b) 2005年国際マインドスポーツ協会（IMSA）の発足

2004年 GAISF 加盟を目指していた国際囲碁連盟は他国際マインドゲーム団体（International Federation / IF）と接触、各種の情報交換やアドバイスなどを受ける機会に恵まれました。そうした中から2005年世界ブリッジ連盟（WFB）Jose DAMIANI（ジョゼ・ダミアニ）会長の発案で、GAISF に加盟する国際マインドスポーツ4団体（チェス、ブリッジ、囲碁、ドラフト）による新たなオリンピック運動を共同で推進するために、国際マインドスポーツ協会（International Mind Sports Association / IMSA）が発足しました。

IMSA 発足の理由として、身体スポーツとは明らかに異なるマインドスポーツを IF

レベルで組織化し、団体として GAISF 及び IOC に働きかける方が個々の団体で活動をするよりも効果的であることが大きい事にあります。すでに90年代 IOC 加盟をしているブリッジとチェスは、それぞれ IOC に対しオリンピックの競技種目に承認されるべく長年努力を続けていますが芳しい結果が出ていません。その現状を打破するために、ブリッジとチェスは新しい方向性として各種 IF をまとめて一団体（IMSA）とし、それを母体に IOC 公認の競技会としての開催を獲得しようとのねらいです。（例：パラリンピックのように夏冬オリンピックとは別イベントではありますが、IOC 公認競技として同年に同施設を利用して開催しています）

一方、IOC 加盟を目標とする囲碁とドラフトにとっては既に IOC 加盟のチェス、ブリッジから加盟申請に関するアドバイスや、IOC からの情報収集のパイプ役として得るものが大きく、また IOC が公認する新しい IMSA マインドスポーツ大会が実現すれば、全ての国際マインドスポーツ団体にとって有意義です。そうした各 IF それぞれの事情に、共通利点などが噛み合って IMSA の発足に繋がりました。

実際 IOC への働きかけの他と同時に、IMSA 主催の『世界マインドスポーツゲームズ』の企画は進み2008年北京オリンピック後の10月に開催されました。（詳細は後述）国際囲碁連盟として初めて他国際マインドスポーツ競技団体との横のつながりを通じた国際囲碁普及を目指す新しい試みには、大きな可能性と期待が寄せられています。

c) 2008年第一回世界マインドスポーツ北京大会（WMSG）の開催

IMSA 発足目的の一つである世界マインドスポーツ大会（WMSG）が2008年10月、北京で2週間に渡り開催されました。会場の2008年夏季オリンピックのメインスタジアムとなった通称『鳥の巣』目前に位置する北京国際会議中心（Beijing International Convention Center）には IMSA 会員 4 団体 4 競技に象棋を加えた 5 競技から3000人の参加者が集まりました。囲碁競技には60カ国と地域からプロ&アマチュア、関係者を含め700人が男子・女子個人戦、団体戦、ペア戦、オープン戦の 5 種目に参加、史上最大の国際囲碁イベントになりました。交通費は自費（各国 1 名分無料航空券が支給）ですが、北京到着後の食費や宿泊は主催者が負担しました。オリンピックと同じくメダル授与と賞状が授与され、賞金はありません。それでも多くのプロ棋士の参加があったのは

日本、中国、韓国そして中華台北、国際囲碁連盟に加盟する各プロ団体のイベントに対する理解と協力があってこそです。

当初このようなユニークかつ初の試みのため参加者数予測が全くできず、準備段階ではまさに五里霧中でした。ふたを開けてみればこれだけの参加人数の大規模イベントに、国際囲碁連盟や地元大会事務局はパニック寸前の状況でしたが、無事成功裏に終わったのも主催者の北京市、そして中国棋院囲碁部の全面的な協力のおかげに尽きません。またこの大会を共同で成し遂げたことにより、中国棋院囲碁部と国際囲碁連盟が親しくなれたことは思わぬ成果でした。

また世界マインドスポーツ大会期間中に開かれた国際囲碁連盟臨時理事会で『今後のIGF運営について、囲碁界のリーダー国である日中韓国のトップが集まり一緒に考えていく時期であるのでは』と、その当時、国際囲碁連盟副会長で中国囲碁協会王汝南会長からの提案を受け、翌年から三カ国棋院首脳会議がスタートするきっかけとなりました。（詳細は後述）



図4 各国旗を掲げた選手団の入場は華やかでインパクトがありました。第一回世界マインドスポーツ大会開会式での一幕。

d) 2012年第二回世界マインドスポーツ大会リール(WMSG)と今後

第一回大会から4年後の2012年、オリンピックイヤーに併せた第二回世界マインドスポーツ大会の実施を目指し当時のジョゼ・ダミアン二前IMSA会長は各方面に働きかけを行ったものの芳しい結果が出ず、開催地及びスポンサー確保など全ての調整が遅れました。2012年春、定期イベントとして予定されていた8月フランス・リールでの世界ブリッジ大会の会場に併設する形で第二回世界マインドスポーツ大会の開催が発表され

ました。その時期に大きな国際大会を控えたチェスは参加を辞退、国際囲碁連盟はヨーロッパ囲碁連盟の理解と協力を得て28ヵ国と地域から200人の参加がありました。準備と告知への十分な時間がなかったことからプロの参加はなく、10日間にわたり男子・女子個人戦、団体戦、ペア戦、ユース大会の5種目が開かれました。

IOC 公認の競技大会として信頼と経験を得るために、また IMSA として独自の活動を広げるためにも世界マインドスポーツ大会の継続が望まれるところですが、まだ認知度の低いIMSA への支援は乏しく、現実的にはジョゼ・ダミアーニ前 IMSA 会長の個人的なネットワークから発するものが大半を占め、そのため不透明かつ公平性に欠ける運営とイベント内容であったと感じます。またチェスが不在のマインドスポーツ大会が社会的に認知されるのか疑問もあります。慣例でいけば第三回世界マインドスポーツ大会は2016年ブラジルでの夏季オリンピックに併せて開催される事になりますが、現時点で開催候補地やスポンサーはありません。大会の実現にむけ2013年 IMSA 会長に就任した国際チェス連盟キルサン・イリウムジーノフ (Kirsan ILYUMZHINOV) 会長を中心として、積極的な働きかけが望まれます。

e) 世界アンチ・ドーピング規約の承認とドーピング検査の実施

身体に悪影響を及ぼす薬物を使用してまでも、メダル獲得のために取り組む団体や選手が後を絶たない近年のスポーツ界です。中国や韓国のように『スポーツ』として早い時期から自国のオリンピック委員会に加盟している国や地域もありますが、日本国内では『囲碁は文化』との認識が古くから根強くあり、国際囲碁連盟も長らく世界アンチ・ドーピング機構 (World Anti Doping Agency / WADA) と距離を置いていました。しかし GAISF 加盟や第一回世界マインドスポーツ大会への参加をきっかけに、身体スポーツと同様に公平性や国際社会性を求められる昨今の風潮と周囲からの強い指導により、国際囲碁連盟は2008年9月 WADA を承認。2010年5月初めての競技内ドーピング検査が第31回世界アマチュア囲碁選手権戦杭州大会で実施されました。

マインドスポーツと身体スポーツとが同じ薬物検査基準で計られる現状に疑問を唱える声は多数ありますが、国際スポーツ団体全体のうち3%にも満たない国際マインドスポーツ団体のために、別の薬物検査基準を設定するための費用を捻出する余裕は WADA も IMSA にもないのが現状です。メダルのかかるオリンピック競技とも無縁

で、WADA から『ローリスクスポーツ』と評価を受けている囲碁は、検査の実施回数や内容については身体スポーツと比べて緩やかなものとなっています。例えば検査方法は尿検査のみで血液検査はありません。2013年第34回世界アマチュア囲碁選手権戦仙台大会では、日本で初めてとなるドーピング検査を行いました。今後も国際囲碁連盟主催の大会を対象に検査の実施を継続していきます。

f) 2011年新しいイベント＝スポーツアコード世界マインドゲームズの開催

GAISF 時代は国際スポーツ団体を統括する組織という存在でしたが、2009年スポーツアコード (SportAccord) に改名、それに伴い IOC 主催『夏冬オリンピック大会』のようにスポーツアコードに加盟する団体を束ねて独自の新しいイベントや大会を企画し、収益にも力を入れる新しい方針が打ち出されました。そのような背景からスポーツアコードに加盟しているマインドスポーツ 4 団体を統括する組織として、IMSA はスポーツアコードから注目を受けることになります。国際囲碁連盟にとっても他マインドスポーツ団体にとっても、このようなスポーツアコードからの新しい提案は興味あるところで積極的に受け入れられました。

当時スポーツアコード会長であった Hein VERBRUGGEN (ハイン・ブルーゲン2013年辞任) 氏は、2008年夏季オリンピックの縁で培った北京市との親密な関係からスポーツアコード主催のマインドスポーツ大会の企画を北京市に持ちかけ、結果として2011年12月『第一回スポーツアコード世界マインドゲームズ北京大会』の開催が実現しました。

『第一回スポーツアコード世界マインドゲームズ北京大会』は2008年同じ北京で開催された IMSA 主催『第一回世界マインドスポーツゲームズ』と同じく 5 種目 (IMSA 会員 4 団体 4 競技 + 象棋) また会場も同じ北京国際会議中心 (Beijing International Convention Center) で行われましたが、こちらは少人数制 (囲碁競技選手30人／全体で250人) で世界トップレベルの大会であることが義務づけられるなど、競技内容は全く違います。そしてまた渡航費用&現地滞在費は主催者が負担し、総合賞金250,000\$ (第一回目) も支給されるなど、条件も全く違ってしています。その後2012年～2014年まで北京での継続開催が決まり、賞金額は400,000\$ にアップしました。この大会を通して

プロ組織（日本、中国、韓国、台湾各棋院）との連携を深め、また貴重な収益事業として国際囲碁連盟にとって大切なイベントです。

スポーツアコードは世界マインドゲームズの他にも加盟団体の特色を活かした統合国際競技大会、世界アーチスティックゲームズ、世界コンバットゲームズ、世界ビーチゲームズを企画、新事業を展開しています。加盟団体にとっても、スポーツアコードにとってもオリンピックとは異なる新しいイベントとの開催に手応えを感じているようで、今後の継続を目指しスポーツアコードは開催地やスポンサーの確保に奔走しています。

4．2009年～三ヵ国棋院で支援する新しい体制へ

a) 2009年から始まった三ヵ国棋院首脳会議

国際囲碁連盟をどのように運営していくか、2009年1月三ヵ国棋院のトップが北京で開かれた『トヨタデンソー杯決勝』に併せて集まり、打ち合わせを行いました。その中で日本、中国、韓国各棋院は資金面、運営面も公平に国際囲碁連盟を支援していくことが確認され、2010年から国際囲碁連盟に対し各国棋院は3万ドルずつ助成金を負担、当初会長国はその他に自国に設置する会長事務局費用6万ドルを負担（合計9万ドル）するとの取り決めをしました。

また同時に国際囲碁連盟会長（任期二年）も公平に三ヵ国棋院の輪番制で務める事となり、発足以来、実質的には財政的や運営での日本棋院一カ国に頼った体制を卒業し、ようやく国際組織らしく国際囲碁界からの支援による運営へと大きなステップを踏み出しました。今後は三ヵ国棋院首脳会議を通し、国際囲碁連盟事務局と連携をとりながら実質的な国際囲碁連盟の運営を進めていくことになります。その後第一回三ヵ国棋院首脳会議は2009年4月富士通杯東京大会の際に開かれ、2014年1月現在までに12回に及ぶ会議が行われています。

ｂ）時代にあわせ変化する世界アマチュア囲碁選手権戦

三カ国棋院が国際囲碁連盟への支援を決めたことから、世界アマチュア囲碁選手権戦にも大きな変化がありました。その一つとして日本航空が主催であった発足当時から2008年第30回世界アマチュア囲碁選手権戦東京大会までは日本＝自国の往復航空券が無料で支給されていましたが、その後財政的な問題から渡航費用は選手が部分負担する事となり、三カ国棋院で支援する体制に変わった2010年第33回世界アマチュア囲碁選手権戦杭州大会からは渡航費用は自費に改訂されました。（国内滞在費は主催者負担）それにより参加人数は2割程減少しましたが、渡航費用の負担がなければ開催可能な国が増えますし、またこれまで重要視されてこなかった会員国自身の財政面や組織力の向上に繋がる機会になると期待しています。



図5 2006年第27回世界アマチュア囲碁選手権戦長崎大会の風景
ハウステンボスにて68カ国が参加、優勝は日本代表平岡聡選手。
準優勝は同じく7勝1敗の中国代表唐韋星選手（現在プロ棋士）

世界アマチュア囲碁選手権戦が始まった当初、このような棋力向上と国際囲碁交流の機会を得られる素晴らしい機会は、多くの囲碁発展途上国にとっての大きな目標でした。日本発の世界にむけた囲碁普及として歴史的にみても大きな功績であり、しかも全て主催者負担で無料で参加できる夢のような待遇でした。しかしその反面、日本だけで

国際囲碁連盟のなりたちと今後の課題

開催し日本だけが支援する体制があまりに長い間続いた結果、“日本による日本のための世界囲碁イベント、国際囲碁連盟も日本棋院の一部のようなもの”というような受け止められ方をされ、他国の理解や協力を得る機会が難しかったマイナス点もあります。多額の運営費を必要とする国際囲碁大会の開催が可能な国といえば、未だに東アジアの国々が中心である現状ではありますが、そうした過去の経緯を分析することにより、今後の国際囲碁界の発展に活かせることを期待します。

2014年第35回世界アマチュア選手権戦は韓国で7月（予定）初めて開催されます。いずれサッカーや他スポーツ同様に世界各地で開催される、本来あるべき世界レベルでの国際大会に囲碁界も成長できるように心から願っています。

（注：その後2011年より会長国は4.5万ドル（他二国の1.5倍）を国際囲碁連盟に助成し、会長事務局費用は自国で負担する事に改訂されています。）

5．国際囲碁連盟の今後の課題

a) 国際囲碁連盟承認（主管）の国際棋戦の運営と国際ランキング制度

世界で唯一の国際囲碁組織として国際囲碁連盟は囲碁を支援する団体や会員同士の情報交換の場であると同時に、今後ますますの国際囲碁普及を念頭に国際棋戦を主管する組織であるべきと考えます。スポンサーがあればどの国のどの組織でも国際囲碁大会ができるため、アマチュア&プロ大会問わずいくつもの国際棋戦が乱立している囲碁界の現状は他の国際スポーツ団体から見れば異様でしょう。また昨今は毎年のように前触れなく新しい国際プロ棋戦が誕生していることから、個々の国際プロ棋戦に対するインパクトや興味が薄れ、国内棋戦との調整はどんどん難しくなり、それに伴い過密スケジュールからくる棋士への負担も懸念されます。

殆どの国際スポーツ団体はポイント制を導入し、総合ポイントにより国際ランキングを制定しています。今年の世界一は誰なのか？XX選手は世界で何番目に強いのか？という誰しも興味をもつ点が一目瞭然で分かることで、そのスポーツ愛好家でなくとも一般にも広くPRができます。それは同時にスポンサー獲得にも直結する重要なポイント

トです。残念ながら囲碁界にはこのような国際ランキング制はないため、前記のような質問には返答に困ってしまうのが現状で大変なマイナスです。

具体的には国際囲碁連盟主管の大会は『国際囲碁大会』の名称を使用できるとし、国際囲碁連盟の承認を得ないものは非公式大会とします。公式大会中、アマチュアもプロも参加可能なオープン戦、招待棋戦、地域別棋戦など内容や条件に応じてクラスを分け、チェスや他スポーツと同様にポイント制とし、それぞれのクラスや成績に応じ取得したポイントを加算した総合ポイントでその年の国際ランキングを決めるというものです。国際囲碁大会を主に主催している三ヵ国棋院を中心に互いの状況やこれまでの経緯などを加味した上で公式大会の数や年間スケジュールを決め、非公式大会への参加不参加は選択制とし、公式大会のみ国際ランキングに反映します。それにより各方面への事前告知や宣伝も計画的に進められますし、棋士も対局予定を管理しやすくなりベストな体調で臨めます。

国際ランキング制度は国際囲碁連盟だけが、だからこそできる事業です。今後の国際囲碁普及、発展にむけて是非検討頂きたい課題です。

ｂ) 三ヵ国棋院の相互理解と将来にむけた協力体制の継続

今後しばらく国際囲碁連盟の中心となって運営に携わっていくのは、これまでの経緯からも財政的な面からも日本、中国、韓国の各国棋院でしょう。三ヵ国の囲碁事情はそれぞれ違いますし社会状況、価値観も様々です。また外交面での三ヵ国の関係は日々変化をしており、これから先どんな影響を及ぼすか分かりません。国際囲碁連盟の発展は国内の囲碁発展にも繋がる、車の両輪のようなものです。戦うのは思っきり盤上で、その他はお互いの立場を尊重し合い協力体制を継続していくことが、これからの国際囲碁界に欠かせない課題であると思います。

昨年アメリカ囲碁協会は念願のプロ制度を設立し、アメリカ囲碁協会公認の二名のプロ棋士が誕生しました。ヨーロッパでは中国人囲碁愛好家の支援を受けて、ヨーロッパ囲碁連盟主催の第一回プロ入段試験（仮称）が2014年夏に計画されており、東アジアだけでなく欧米でも囲碁普及が活発化している昨今です。今後ますます幅広く様々な形で変化していく国際囲碁界のまとめ役として、皆さまに活かされる国際囲碁連盟であるこ

国際囲碁連盟のなりたちと今後の課題

とを願っています。

参考文献：

- 表 1 国際囲碁連盟ホームページより <http://ntergofed.org>
- 図 1 日本棋院発行 別冊棋道『第一回世界アマチュア囲碁選手権戦』1979年
- 表 2 国際囲碁連盟資料
- 図 2 国際囲碁連盟発行『爛柯』1998年度版より
- 図 3 重野撮影
- 図 4 Ranka-online 『世界マインドスポーツゲームズ』アルバムより
http://rankauploads.intergofed.org/wmsg/Photo_Album/index.html
- 図 5 重野撮影